なったことである。私はそのうち97枚は集めているが，残りの3枚は大金を投じてもよいと思うもののまだその機会がない。現物は小倉先生から見せて戴いた。なほ余談ではあるが，1976年にデンマルクの菌学者ハンゼン（Emil Christian Hansen 1842-1909）を記念する切手1枚が発行された。彼の著書（Fungi fimicoli danici 1876-7）出版100年の意味である。図柄には実験室内の姿が画かれてあり，菌は欠けているが，同時にコペンハーゲン大学で印刷した封筒には，糞生菌 *Sporormia pulchra* Hansen の顕微鏡図が載っている。（国立科学博物館）

---

□日野 巌：**植物怪異伝説新考** pp. 381, pls. 13, 有明書房（東京），1978, ¥6800。植物の種々の奇形，変形，怪異などについては，白井光太郎博士の「植物妖異考」が有名である（永らく絶版であったが，有明書房から1975年に複刻された）。ただそれは，さすがに古い書き方が，読みづらいと感ずるのは否定できない。それをずっとくだけた文章に直しただけでなく，新らしいデータを加え，また順序をかえて序説，霊異篇，形異篇，色異篇，化異篇，妖異篇の六篇に分けて述べてあるのでずっと読み易く，また読んで楽しみを感じ易くなったのは私だけではあるまい。竹実満（ちくじつみのる）などは多くの文献も加えられている。また「山姥の休め木」は *Cyphella pulchra* とされていたが，これに著者は疑問を持っていたところ，小林義雄博士が Kew にバークレイの原標本をたずねてその誤りを確認し *Corticium argenteum* Y. Kobayasi とした（1971）など中々新らしいこともものっている。しかし全体としてみると，文献の出版は古い方に片よっているのは惜しいし，記事に今少し新らしい見解や解説を加えてほしかったと思うのである。（前川文夫）

---

**○ミズバショウの新産地について**（矢野悟道）Norimichi YANO: On a new locality of *Lysichiton camtschatcense* Scott

兵庫県養父郡大屋町加保坂にミズバショウの新産地がみつかり，現在300株余りの個体が確認されている。従来のミズバショウの南限域は，岐阜県郡上郡鷲村洞西の蛭ケ野高原（東径136°56′，北緯35°59′）とされていたが，今回ミズバショウが発見された加保坂（東径134°39′，北緯35°21′）は，蛭ケ野よりも更に南にあり，我国の西南限分布域にあたる。しかし，加保坂のミズバショウが果して自生であるか否かについては，更に充分な検討が必要であるので，1975年5月にミズバショウを確認して以来，1976年，1977年，1978年の3年に亘って，花粉分析学的調査，$^{14}C$ による年代測定，周辺および湿原の植生調査を行った結果，ほぼ自生のミズバショウであることの確認をえた。花粉分析の結果は既に，三好，矢野，波田（Pollen analysis studies of moor sediments in Chugoku, Japan 3. Kabosaka moor (Hyogo Pref.). Bull. Hiruzen

Research Inst. 2, 1976) によって報告されている。

加保坂湿原は蛇紋岩地帯にあり，高度約 600 m で，北西から南東に向って平均 13° の傾斜をなす谷湿原で，数ケ処からの湧水により維持されている。湿原内に成立する植生は次の 2 群落，6 群，3 小群からなっている。

$A_1$ シロイヌノヒゲ—イトイヌノヒゲ群落

　$B_1$ イトイヌノヒゲ—アオコウガイゼキショウ群

　　$C_1$ 典型小群，$C_2$ コイヌノハナヒゲ小群

　$B_2$ コバギボウシ—タムラソウ群

　　$C_3$ モウセンゴケ—アリノトウグサ小群，$C_4$ ショウジョウスゲ—ホソバシュロソウ小群

$A_2$ ハイイヌツゲ—オオミズゴケ群落

　$B_3$ ゴウソ—ヒメシダ群

　$B_4$ ミズバショウ群

　$B_5$ ヤマドリゼンマイ群

　$B_6$ ネジキ—ソヨゴ群

なお，周辺部ではコナラ—アセビ群落（アカマツ—モチツツジ群集）が成立している。

泥炭層は比較的浅く，深さ 125 cm 迄採取が可能であった。深さ 50 cm における $^{14}C$ による年代推定は925±80年，深さ 100 cm における年代推定は 8190±115 年であり，また深さ 0 から 125 cm の間のいずれの層中からも，ミズバショウ属のものと思われる化石花粉が少量ずつ採取された。深さ 100 から 125 cm の層からは，*Picea*, *Pinus* (H Type), *Tsuga*, *Betula* 等の化石花粉が採取され現在我国の亜寒帯地域に成立するシラベ—アオモリトドマツ群集が，過去に成立していたことが予測された。

ミズバショウ属 (*Lysichiton*) の化石花粉とザゼンソウ属 (*Symplocarpus*) の化石花粉とを区別することは出来なかったが，現在周辺部にザゼンソウ属の植物が生育していないことから，晩氷期から現在に致るまで生き残ってきたミズバショウであることがほぼ確実となった。

（神戸女学院大学）